



只見町ブナセンターだより

<季節のごあいさつ>

木々の葉も落ち、すっかり生き物の気配が消えた森は、冬の訪れを感じさせます。年の瀬を迎えたこの時期に暖かい日が続きますが、みなさまいかがお過ごしでしょうか。町はこれから一面の冬景色へとかわっていきます。雪とともに暮らす只見へ、ぜひお越しください。

===== 開 催 中 =====

【企画展】

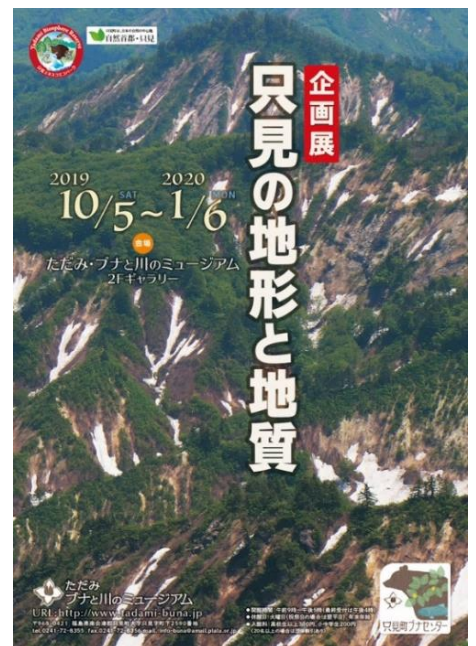
只見の地形と地質

新潟県境の越後山脈に接する只見町。豪雪による雪崩で浸食されて雪食（せっしょく）地形が発達し、それゆえ急峻で複雑な山地構造の上にはブナ林をはじめとする様々な植生がモザイク状に成立しています。さらに雪解け水や雨水は沢となり、やがては別の沢と合流し川となり、町内の谷や平野部を血管のように流れ下ります。そうした水辺域には溪畔林や河畔林など特異な植生が形成されます。

このような多様で豊かな自然環境が形成された要因の一つとして、この地域の地形と地質が挙げられます。本企画展では、只見町の過去から現在までに形成されてきた地形と地質に着目し、その特徴とそこに成立する植生について紹介しています。

■会 期：2019年10月5日（土）～2020年1月20日（月）

■場 所：ただみ・ブナと川のミュージアム 2階ギャラリー



===== 行 事 案 内 =====

【企画展】

只見の山を眺めれば… そこにある樹木に気づく企画展

現在開催中の企画展「只見の地形と地質」では、只見町の地質構造や地形の特徴とそこに成立する植生について紹介しました。この企画展では、さらに、それらの植生を構成する樹木を見ていきます。只見の山を眺めれば、緩斜面の尾根、急な雪崩斜面、溪谷、平野、河川など多様な地形が目に入ります。そこに成立する植生を注意深く観察すると、それぞれに特

徹的な樹木が生育していることがわかります。企画展では、そのような樹木をとりあげ、生育特性とそれを支える環境について紹介します。日常的に目に入る只見に生育する樹木の個性的な生き方に気づいていただければ、春の森での樹木観察が楽しみになります。

- 会 期：2020年1月25日(土)～2020年3月30日(月)
- 場 所：ただみ・ブナと川のミュージアム 2階ギャラリー

【ブナセンター講座】

只見の樹木と巨木・奇木(仮)

只見町ブナセンター館長ならびにセンター長を歴任し、只見町の自然環境についての詳細な調査・研究を行って来られた鈴木和次郎氏を講師にお招きし、只見町の樹木についてお話しいただきます。また、2012年度に開催した企画展「只見町の巨樹・巨木」でご紹介した樹木のその後についても調査結果を紹介していただく予定です。

- 講 師：鈴木 和次郎 氏(只見ユネスコエコパーク支援委員、元只見町ブナセンター長・館長)
- 日 時：2020年2月下旬～3月中旬 ※日程が決まり次第HPに掲載いたします
- 会 場：ただみ・ブナと川のミュージアム セミナー室(只見町只見町下2590)
- 参加費：無料 ※但し、入館料が必要になります

【草木染体験教室】

ぶなの葉染めをしてみよう!

本教室は、只見町で採取した植物を染料として草木染を行い、町認定の伝承産品を製作している「ぶないろくらぶ」を講師にお招きします。体験教室ではブナの落葉を染料とする「ぶなの葉染め」の各作業行程について学び、バンダナやハンカチを素材に、模様つけと染めを体験していただきます。染め終わった素材はお持ち帰りいただけます。

- 日 時：2020年1月19日(日) 13:00～16:00
- 会 場：ただみ・ブナと川のミュージアム セミナー室(只見町只見町下2590)
- 参加費：高校生以上1,300円、小・中学生700円
- 持ち物：汚れてもよい服装、ひじまでの長さの厚手のゴム手袋
- 定 員：15名(事前予約制) ※申込締切2020年1月17日(金)

お申し込み・お問い合わせは、只見町ブナセンターまで ☎ 0241-72-8355

【只見ユネスコエコパーク関連事業】

令和元年度「自然首都・只見」学術調査研究成果発表会

「自然首都・只見」学術調査助成金事業は、只見町の自然環境、民俗・歴史について調査して頂ける全国の研究者に助成を行い、住民への学習機会の提供、各研究機関との交流の推進、研究成果の活用を図ることを目的として平成24年度から実施しています。今年度は大学や博物館に所属する8名（団体）が、この助成を受けて調査研究に取り組みました。下記の日程で成果発表会を開催いたしますので、みなさまぜひご参加ください。

日 時：2020年1月26日（日）13：00～16：30

会 場：朝日振興センター（只見町黒谷館658）2階ホール

参加費：無料 ※事前申込不要

【発表内容・発表者】

① 「ハリエンジュとヤナギ類の分布に及ぼす河川環境と生理生態的要因」

平山 ころも（新潟大学 農学部）、崎尾 均（新潟大学 佐渡自然共生科学センター）〈13：15～〉

② 「実験下におけるヤマアカガエル幼生とクロサンショウウオ幼生の誘導防衛および誘導攻撃に関する表現的可塑性」

清水 宏一郎、後藤 俊矢（新潟大学 農学部）、阿部 晴恵（新潟大学 佐渡自然共生科学センター）〈13：35～〉

③ 「ブナの開葉日はなぜ異なる？—ブナ林内・個体内の葉群高および光環境との関係」

西坂 志帆（横浜国立大学大学院 環境情報学府）、酒井 暁子（横浜国立大学大学院 環境情報研究院）〈14：00～〉

④ 「只見町産植物における機能性（抗酸化活性・消化酵素阻害活性）評価」

目黒 周作、桑原 隆明（茨城キリスト教大学 生活科学部）〈14：20～〉

⑤ 「ゲノム分析による只見町ブナ個体群の個体数変化推定」

阪口 翔太（京都大学大学院 地球環境学）〈14：45～〉

⑥ 「只見町に伝わる生物資源利用に関する伝統的生態学的知識の保全と活用」

小柳 知代（東京学芸大学）、松浦 俊也、古川 拓哉、小山 明日香（森林総合研究所）〈15：05～〉

⑦ 「只見町に自生するトキソウの遺伝的多様性の評価と保全」

長尾 賢治、南山 泰宏（京都教育大学 教育学部）〈15：30～〉

⑧ 「只見町におけるアシナガバエの多様性」

柘永 一宏（滋賀県立琵琶湖博物館）〈15：50～〉

=====**活動報告**=====

【野鳥観察会】 9月28日(土)

只見町の秋の鳥～渡ってくる鳥・去る鳥

企画展アーカイブ「只見の野鳥とその生態」に関連し、この野鳥観察会では秋を迎えるこの時期に北の国から渡ってくる冬鳥と南の国へ渡っていく夏鳥の両方を観察しました。観察地は「ただみ・ブナと川のミュージアム」から、隣接する水の郷只見川公園、只見川沿いに只見ダムまでのコースです。

出発地点の「ただみ・ブナと川のミュージアム」では、隣接するシロヤナギの高木から、早速、騒がしい鳥の音が聞こえてきました。声の主はヒヨドリで、数十羽が群れとなって集まっていました。ヒヨドリは日本では普通に見られる鳥ですが、実は日本とその周辺にしか生息しない世界的には珍しい鳥です。葉陰にいるとつけるのは難しいのですが、双眼鏡や望遠鏡を駆使して姿を確認することができました。ヒヨドリには渡りをする個体と定住する個体の両方がいることが知られていますが、時折、数羽の群れが飛び立ち移動する様子から渡り途中の集団と思われました。



▲公園内で観察する参加者

公園ではほかに、湿地でオオヨシキリの巣を観察しました。人の背丈ほどあるヨシの茎の間に枯れ草を編んで作られています。この湿地では、夏中、オオヨシキリの「ギョギョシ、ギョギョシ」という鳴き声を聴くことができていましたが、この時はすでに繁殖を終えて移動してしまっただけでした。

川沿いでは、ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイの3種揃って見る事ができました。上流のほうではカワウが魚を採食しており、時折、潜水し見えなくなり、またひょっこりと現れる様子などを観察しました。道中、ゴマナやノコンギク、オトコエシといった秋の花が咲いており、こちらも観察しました。只見生まれの参加者からは、子供の頃の街の様子や文化についてのお話も聞きました。



▲ダム湖で記念撮影

ダム湖に到着すると、北の国から渡ってきたばかりのキンクロハジロがいました。ほかのカモ類に先立って渡ってきたようです。ほかに留鳥のアオサギやカルガモ、トビが湖面からさらうように魚を獲るシーンを見ることができました。参加者は12名で、秋の只見町の野鳥と自然をじっくりと観察するよい機会となりました。

【『ただみ観察の森』 観察会】 10月5日（土）

杉沢のユビソヤナギ林 -保全の必要性について考える-

今年度2回目となる『ただみ観察の森』観察会を杉沢のユビソヤナギ林で実施しました。『ただみ観察の森』は、只見ユネスコエコパーク域内の自然環境やそこに生息・生育する野生動植物の現状を理解し、身近に触れてもらうことを目的とした場所で、町内の7カ所に設置されています。杉沢集落の伊南川河畔にある『観察の森』には、国内でも限られた河川にしか分布しないユビソヤナギが生育します。只見町を含む伊南川沿いに50km以上にわたり断続的に見られ、国内最大級の自生地となっています。河川本来のはたらき、営力、によって形成される砂礫地に生育するこのヤナギは、近年の河川改修工事による影響を受けて数を減らしています。今回は、ユビソヤナギや他のヤナギ類を観察しながら、只見町におけるユビソヤナギと河川環境の保全の必要性について考えました。



▲ユビソヤナギ林の説明を受ける参加者

杉沢のユビソヤナギ林には、ユビソヤナギ以外にも複数のヤナギ類が生育しています。ここでは、主にシロヤナギ、オノエヤナギ、オオバヤナギを加えた4種が見られました。実際にこれらの樹皮や葉の形状を観察しながら、4種の見分けた方をブナセンター職員が解説しました。中でも、ユビソヤナギとオノエヤナギの葉は一見して識別するのが難しいですが、葉の鋸歯（縁のギザギザ）の違いで見分けることができます。ユビソヤナギの鋸歯は粗く、オノエヤナギの葉の縁は波状で鋸歯がほとんどありません。また、素手で何枚かの葉を握ると、感触もだいぶ違うことが分かります。

最後に、参加者は河川敷におりて、洪水被害を防ぐための河川工事とユビソヤナギの保全を両立させるための課題について話し合いました。参加された町民の方からは、「毎日目にしていたものを意識的に考える良い機会になった」、「集落の人達に説明して保全に努めたい」といった感想をいただき、ユビソヤナギと河川環境の保全について理解を深めることができました。



▲伊南川を背景に記念撮影

【『ただみ観察の森』 観察会】 11月10日（日）

蒲生集落あがりこブナの森 -ブナを利用してきた人の暮らしを知る-

今年度最後となる『ただみ観察の森』観察会を、「蒲生集落あがりこブナの森」で実施しました。蒲生川と真奈川出合の平坦な地形にある「蒲生集落あがりこブナの森」は、かつて旧真奈川集落の人々が生活のために利用していた森です。化石燃料が広く普及する以前、只見では集落近くのブナなどは薪炭材に利用されていました。雪が固く締まった初春に雪上で伐採が行われるため、そのようなブナには地上2~3mという高い位置で萌芽した複数の幹が立っています。この状態の木を、あがりこといいます。『観察の森』では、あがりこ型樹形のブナを通して、蒲生地区ではブナや森をどのように利用してきたのかを知ることができます。



▲あがりこを観察する参加者

観察会では、ブナ、ハウチワカエデ、ヤマモミジなどの紅葉、ユキツバキやエゾユズリハといった常緑樹を観察するとともに、あがりこのブナとかじご焼き（炭焼き）についてブナセンター職員が解説しました。かじご焼きは、地面に1~2mほどの穴を掘り、直径数センチ・長さ1mほどのブナなどの生木を炭にするという原始的な炭焼き法で、只見では1960年代まで各地で盛んに行われていたようです。かじご焼きに利用されるブナは、地際で幹が繰り返し伐採されるため、多数の幹が四方に張り出した形になります。

次に、かじご焼きの跡を見ながら森の奥へと進み、ブナのあがりこを観察しました。一般にあがりこと呼ばれる木は、幹の同じ位置で伐採されるため、そこから瘤を伴って複数の幹が生じます。しかし、この森のあがりこは伐採された位置を示す瘤が同じ幹に数カ所あることが分かります。これは、伐採による萌芽力の低下を防ぐため、集落の人々が伐採位置を幹の上部へと移動させたことが原因と考えられています。さらに、ここではかじご焼きの利用により形成されたブナと、あがりこが組み合わさった「複合型」と呼ばれるブナも見られます。上述した二つの伐採利用を受けることで、ブナは地際に多数の萌芽幹が張り出した、あがりこ型樹形になります。



▲あがりこの前で記念撮影

当日は13名の方にご参加いただき、紅葉が残るブナ林を散策しながら、人とブナとの関わりについて知っていただくよい機会となりました。

地層からひもとく只見の自然

企画展「只見の地形と地質」に関連して、元福島県立博物館専門学芸員の竹谷陽二郎氏を講師にお招きし、講座を開催しました。

はじめに、竹谷氏は只見の地形区分を山地と平地に大別し、さらに山地に関しては、起伏量ごとに大起伏山地・中起伏山地・小起伏山地に分けたうえ、火山地形を付け加え、それぞれの地形がいかなる地質によって構成されているのかを説明されました。例えば、起伏が600m以上



▲只見の地形と地質を解説する竹谷氏

の大起伏山地は、只見町では主に伊南川および田子倉ダムより南の奥地に分布しています。これらの地形はジュラ紀に形成された泥岩やチャートなどの古く硬い岩石によって構成されており、山地の尾根が延びる方向が地層の延びとおおむね一致しています。このように地形と地質の関連を捉えると、只見町では起伏量が多い地形は古く硬い地質によって構成されており、逆に起伏量が少ない地形は比較的やわらかい地質によって構成されていることがわかります。只見町の地形と地質は分布ごとに一致しやすい傾向があることが特徴とされます。

次に、竹谷氏は地層の岩相や化石の証拠などから推定できる只見の地層の年代と堆積環境について解説されました。只見地域の地史は時系列順に、①付加体（ふかたい）の形成（ジュラ紀）、②花崗岩マグマの貫入（白亜紀後期）、③グリーンタフ堆積盆の形成と分化（前期中新世～中期中新世前期）、④布沢堆積盆の形成（中期中新世後期～後期中新世前期）、⑤カルデラ火山の誕生（後期中新世後期）、⑥第四紀火山と段丘の形成（第四紀）に区分されます。このようにして、只見地域の大地はおよそ3億年にわたる時を経て形成されました。

その後、参加者から様々な質疑が寄せられ、活発な議論が行われました。本講座では、地層・岩石・化石や地形などの大地の貴重な遺産を手掛かりに、只見の地形と地質について学ぶことができました。

晩秋の只見で地形と地質、植生を観察しよう！

前日のブナセンター講座「地層からひもとく只見の自然」で講師を務めていただいた元福島県立博物館専門学芸員の竹谷陽二郎氏に同行いただき、観察会を実施しました。

只見町では、この地域で最も古い地層として位置づけられるジュラ紀の付加体形成に由来する檜枝岐層群が町南部に、白亜紀後期に貫入した花崗岩類



▲布沢層を説明する竹谷氏

がその北部に分布します。また、町中部～北部にかけての広い範囲に前期～中期中新世の海底火山活動に由来する流紋岩、凝灰岩を中心とする地層が分布しており、その他、火山由来や盆地への堆積で形成された地質が局所的に見られます。

小林地区野々沢にある布沢層の露頭では、その形成と特徴について解説いただきました。布沢層は、この地域にまだ海が広がっていた約1630万年～1420万年前の中期中新世に起きた地殻活動で沈降した盆地に火山灰や泥が堆積して形成されており、そこから産出した化石によりその堆積当時は海底150～200mであったことが分かっています。また、同じ地層からは樹木の葉化石も産出するため、陸から河川などにより沖合に流された葉が堆積したと考えられています。実際に岩石の中からは、古代のブナ属などの葉化石を見つけることができますので、参加者は夢中になって化石を探しました。

その後、ただみ観察の森「梁取のブナ林」（学びの森）で布沢層の周辺に成立する植生を観察しました。この場所は、薪炭材利用のため伐採された森林が再生した二次林であり、高木層にホオノキやハウチワカエデなどが混じりますが、ほぼブナの純林となっています。下層植生には、オオバクロモジ、オオカメノキ、エゾユズリハなどを見ることができます。

伊南川にかかる和泉田（いずみだ）橋の下には、小川沢層の火山礫凝灰岩の河床が広がります。このような景観となった要因はいくつか考えられますが、1つに河川の浸食作用により、他よりも硬い岩盤が残ったためと考えられます。この岩中には、緑色凝灰岩の破片や白い浮石などが含まれているのが見てとれます。また、周辺には、緑色凝灰岩の河床も見られました。



▲「梁取のブナ林」で記念撮影

成法寺（じょうほうじ）の籠岩もまた小川沢層の緑色凝灰岩でできています。海底火山の噴出により形成された緑色凝灰岩がその後、上下からの冷却を受けたことで垂直方向の節理が生じ、その節理に沿って侵食を受けたため、このような形になったと考えられます。

今回の観察会では、只見町の自然環境の根幹を成す地質と地形の観察からはじまり、その上に生育する植生、さらに、そうした環境の中で成立した住民の生活・文化等にもふれることができました。

【ブナセンター講座】 12月15日（日）

小林早乙女踊りの歴史と民俗

NPO 民俗芸能を継承するふくしまの会 理事長の懸田弘訓氏を講師にお招きし、講座を開催しました。さらに、本講座では只見町の小林早乙女踊り保存会の皆様に早乙女踊りを実演していただきました。只見町において、早乙女踊りは新年に稲作の所作を真似て踊り、豊作と家内安全を祈る予祝行事であり、現在に残る数少ない伝統芸能の一つです。



▲早乙女と道化が躍る様子

はじめに、小林早乙女踊り保存会に早乙女踊り・甚句・おけさ・神楽の各踊りや演奏を披露していただきました。早乙女踊りでは、早乙女に扮した3人の男性が、太鼓や笛、唄などの演奏に合わせて、扇子で8の字を描くように動きながら踊ります。早乙女が躍るかたわら、舞台の右手では旦那様と奥様役の前で、道化がご祝儀をいただきます。道化は受け取ったご祝儀を舞台裏にしまうと、扇を早苗に見立てて田植えのしぐさを行い、最後には早乙女達に合流して一緒に踊ります。

次に、講師の懸田氏が早乙女踊りの各所作の解説を交えながら、その歴史と民俗について講演されました。懸田氏によれば、早乙女踊りは今から約200年前の文化年間に会津盆地で生まれ、そこから只見町を含む伊南川流域の各集落に急速に広まったとされます。当時の伊南川流域は高冷地という気候条件に加え、川がたびたび氾濫したため、飢饉が頻発していました。田畑の豊作を祈願することは人々の切実な願いであり、その願いが早乙女踊りの普及につながったと考えられます。懸田氏は最後に、民俗芸能とは「生きるための信仰とせめてもの楽しみ」であるとまとめられました。



▲講演する懸田氏

【只見ユネスコエコパーク関連事業】

10月7日（月）、10月17日（木）、11月28日（木）、12月16日（月）

只見子ども芸術計画 「ブナの森の道具屋さん」

昨年度に連携事業として実施した「福島芸術計画×AST Tokyo2018 地域の文化資源を学ぶ学校連携ワークショップ わたしの好きな只見」の活動を引き継ぎ、朝日振興センターにご協力いただき、ユネスコエコパーク事業として実施しました。今回もアーティストの岩田とも子氏、福島県立博物館専門学芸員の小林めぐみ氏を講師にお迎えし、朝日地区の放課後子ども教室に通う小学1・2年生の児童を対象に活動を行いました。

今回のワークショップでは、只見の子供たちが町の自然の恵みを活かし創作することを目的としています。子供たちには町内のブナ林を訪れてもらい、そこで森に潜んでいる生き物たちの暮らしを想像し、生き物たちが使うかもしれない道具を創作し、展示を行います。

第一回目は、ただみ観察の森「下福井のブナ水源林」で道具の材料を探しました。岩田氏からは、『ひものようなもの、おもしろい形』などキーワードが与えられ、児童たちはそれに沿って興味を持ったものを拾い集めていました。第二回目は、収集した素材をスキャンし、印刷したものを切り貼りしてブナの森の生き物が使う道具を作ります。そこには道具の材料、使い方、何を渡せばもらえるのかななどの説明を書き加えてもらいました。第三回目は、展覧会に向けての準備として、創作した道具の展覧会の看板を作りました。道具と同じ要領で集めた素材を切り貼りして素敵な看板に仕上がりました。第四回目には、ただみ・ブナと川のミュージアムにて各活動で作った道具、看板を展示しました。また、森の生き物たちに「ブナの森の道具屋さん」に来てもらうための招待状を作ってもらい、招待したいお客さんとメッセージを書いてもらい展示作業が終わりました。

完成した作品は2020年2月末までただみ・ブナと川のミュージアムの休憩室で展示し、その後、2020年3月1日（日）に朝日振興センターで実施する「朝日いいものあつめちゃった市」にて展示を行います。



▲「ブナの森の道具屋さん」での展示

*各回の活動の詳しい様子は只見ユネスコエコパークのホームページで見ることができます。

===== お 知 ら せ =====

【ふるさと館田子倉】 2階常設展示の公開をはじめました。

2階展示室では、「只見川流域における電源開発の歴史と人びとの生活」及び「只見線の歴史」について展示しています。

「只見川流域における電源開発の歴史と人びとの生活」では、豪雪を背景とする日本屈指の豊富な水資源が着目され、戦後に電源開発が行われた只見川について、電源開発が行われる以前の歴史、電源開発計画の概要、電源開発計画の中で旧田子倉集落と同様にダム建設に伴い集落移転があった十島・塩沢集落と旧石伏集落、電源開発が地域社会に与えた影響などについて資料の展示と共に解説しています。



▲電源開発の歴史と人々の生活

「只見線の歴史」では、現在、福島県会津若松-新潟県小出間を結ぶ只見線について、その全線開通までのおよそ50年の歴史について解説しています。只見線の路線、列車、周囲の自然環境が織り成す景観は、鉄道ファン、写真家を魅了してきたことはもちろん、近年では海外からも注目されていますが、只見線の全線開通の歴史には田子倉ダム建設工事も大いに関係してきました。



▲只見線の歴史

ふるさと館田子倉は、ただみ・ブナと川のミュージアムとの共通券にて見学いただけますので、只見町にこられた際には、ぜひお立ち寄りください。

【只見町ブナセンター友の会】

友の会会員による写真展「只見の自然と暮らしを撮る」写真募集中！

只見町ブナセンターでは、2020年度秋季より友の会会員による写真展「只見の自然と暮らしを撮る」の開催を計画しております。本写真展は、友の会会員からご応募いただいた只見に暮らす人々の日常や町の自然、文化を撮影した写真を展示することで、只見町の魅力を町内外に広く知ってもらうことを目的としています。スマホやコンパクトデジカメの写真でも大丈夫です。

現在、友の会会員から写真を募集しておりますが、会員でない方でも友の会に入会いただければご応募できます。詳しくは、下記窓口までご連絡ください。

お問い合わせ先：

只見町ブナセンター友の会事務局（ただみ・ブナと川のミュージアム内）

〒968-0421 福島県南会津郡只見町大字只見字町下 2590

TEL 0241-72-8355 FAX 0241-72-8356

E-mail tomonokai@tadami-buna.jp

只見町ブナセンター 2019 年度行事一覧(予定)

	企画展	ブナセンター講座等	自然観察会
12月	10月5日～1月20日 企画展「只見の地形と地質」	12月15日 「小林早乙女踊りの歴史と民俗」	
1月	1月25日～3月30日 企画展「只見の山を眺めれば…そこにある樹木に気づく企画展」	1月19日 草木染体験教室 「ぶなの葉染めをしてみよう！」	
2月		2月下旬～3月中旬 講座「只見の樹木と巨木・奇木(仮)」	
3月		大型野生動物の増加と人間（兼） 保護監視員講習	3月上旬 冬の観察会

<編集後記> くさむし(クサギカメムシ)が家に侵入して冬を越すように、自然界でも生き物たちが冬支度を始める季節となりました。しかし、中には冬季でも活動するかわった昆虫がいます。クモガタガガンボ類(ハエ目)やクロカワゲラ類(カワゲラ目)の仲間はその代表種で、晴れた冬の日、成虫が林内や沢沿いの雪上を歩き回ります。雪に覆われ、静まりかえった野山でこれらを探すことが冬の楽しみです。さて、今年度も残すところあと3カ月となりましたが、ブナセンターでは企画展、講座や自然観察会を予定しておりますので、ぜひご参加ください。それでは、良いお年を。(緒勝)

発行 **只見町ブナセンター** 〒968-0421 福島県南会津郡只見町大字只見字町下 2590 番地



只見町ブナセンター

電話 0241(72)8355

ホームページ <http://www.tadami-buna.jp>

FAX 0241(72)8356

電子メール info-buna@amil.plala.or.jp

Facebook <https://www.facebook.com/tadami.buna>

附属施設「ただみ・ブナと川のミュージアム」、「ふるさと館田子倉」

開館時間：午前9時～午後5時（最終受付は午後4時まで）

休館日：火曜日（祝祭日の場合は翌平日）、年末年始（12月29日～1月3日）

入館料：高校生以上300円 小中学生200円 未就学児無料（20人以上は団体割引）